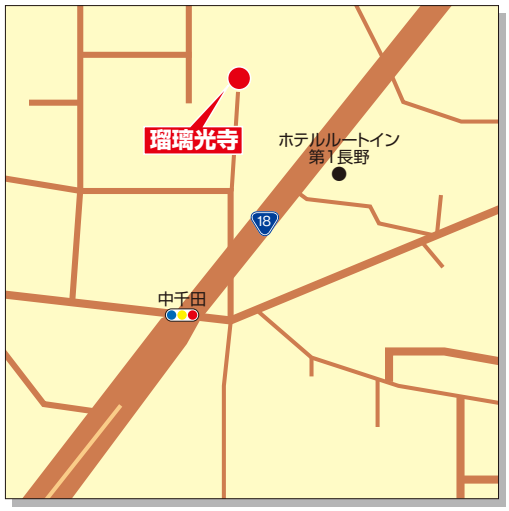
瑠璃光寺 薬師如来像

瑠璃光寺は、もと真言宗の古寺で、「千田のお薬師さん」として地域の人々に親しまれています。

治承４年（1180）に雷火で焼失、寛元２年（1244）に千田親清が再建し、その後、水害により当地に移り、元和元年（1615）に浄土宗に改めました。

宝形造りの本堂には、薬師如来、観音・勢至菩薩、四天王及び十二神将が揃っています。阿弥陀堂は明治14年に再建し、境内には陰刻の摩滅した千田氏の墓が数基残されています。

昭和34年から千田連絡会（上・中千田・母袋・日詰）が管理しており、昭和50年代に墓地の整備や庫裏の改築を行いました。



峯佛山専福寺（励精学校跡）

延慶３年（1310）、千田太郎有親が、父仲親菩提のために千福寺（後に改名して専福寺）を創建しました。

明治６年に、寺の建物を利用して芹田小学校の前身である励精学校が設立されました。

佐久間象山を偲んで何回か松代を訪れた勝海舟が、励精学校にも足を運び、象山の門弟である教員らと語り合ったと伝えられています。芹田小学校にある勝海舟の「励精学校」の扁額は、明治14年に訪れた際、専福寺の庫裏で筆をとって書かれたものです。

また、専福寺境内には、太子堂や乃木希典（のぎまれすけ）筆の「日露戦役忠魂碑」があり、平成５年には、本堂が改築されました。

南高田伊勢社　五反幟

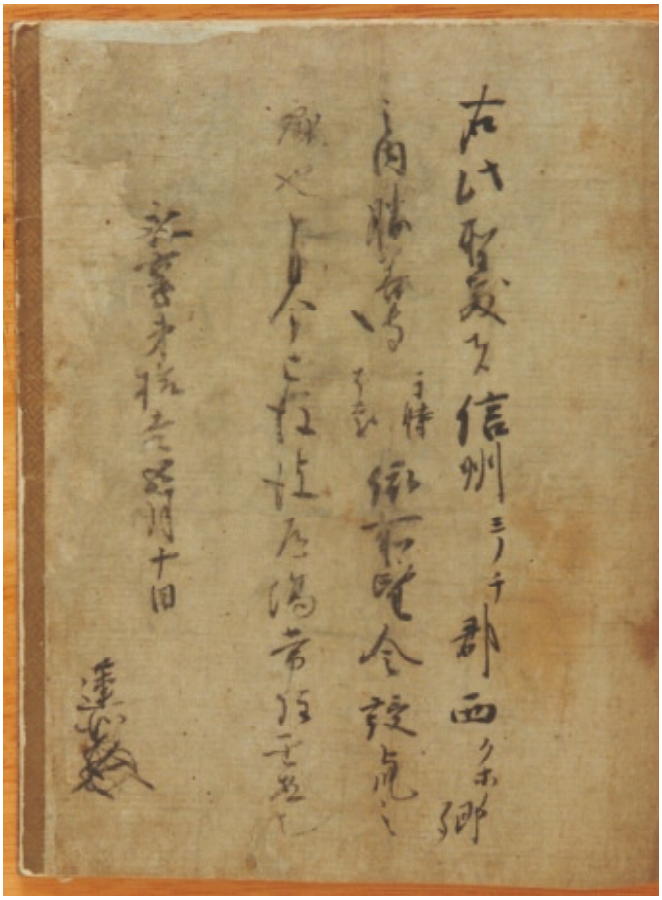
明治26年４月、北長池村の五反幟の作り替えに伴い、高田伊勢社の五反幟も新調することとなり、区の代表者が東京に住む勝海舟の自宅を訪ねて揮毫（きごう）をお願いし、承諾の返事をもらいました。章句は当時の神主で漢学者でもあった平井則正によるもので、幅1.8m、長さ14.2mの幟には、勝海舟の字で次のように書かれています。

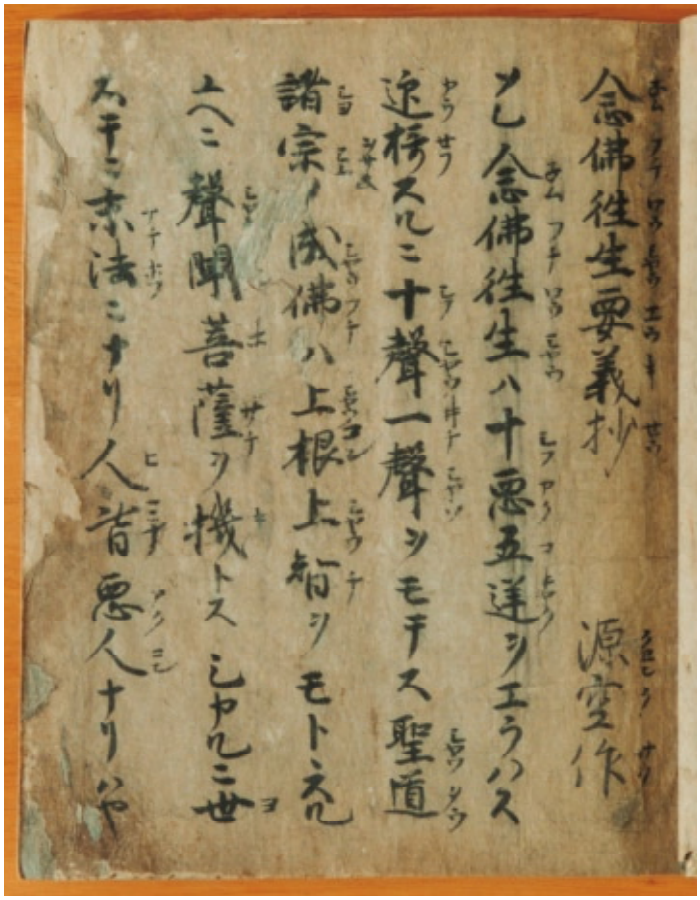
「育　吾　勝　尊」（あがへのみことをやしないたもう）

「常　懐　腋　下」（つねにえきかにいだきたもう）

五反幟は、戦後の大祭で２回のみ掲げられ、長期間に渡り南高田伊勢社に保管されていましたが、平成19年６月に長野市立博物館へ寄託しました。また、この幟の遺墨を平成18年７月に南高田伊勢社造立200周年記念として新調しています。

光蓮寺の法宝物　念仏往生要義抄書写本





この書写本は、室町時代永享11年（１４３９）に、本願寺八代蓮如上人が、当寺七代住職了慶の所望によって授与された御自筆の書写本です。以来、当寺の大切な聖教の法宝物として伝持されて来ました。特に奥書（写真左）には蓮如上人の自筆署名と花押（印鑑のかわりのサイン）があり、授与の年月日、永享11年５月10日が明記されています。更に奥書１枚の中に地名、寺号、住職名まで記録されており、現存する中世古文書の中でも極めて史料価値の高いものと認められているものです。

勝善寺と称していた当寺が、市内上高田西久保から西尾張部現在地に移転（17世紀初、江戸初期）するにあたり、東本願寺より「光蓮寺」の寺号が授与されたのは、蓮如上人の一字を拝領した故です。

光蓮寺の法宝物　本尊阿弥陀如来御絵像

この御絵像は、戦国時代の天正年間に本願寺教如上人より授与された本尊阿弥陀如来御絵像です。当寺十世了順は室町戦国時代、大坂石山（現在の大阪城）の本願寺が織田信長と10年に亘って戦った石山合戦に門徒同行と共に参戦して戦死しました。（天正５年）

一方上高田西久保の寺地はいわゆる川中島合戦で上杉方の陣地となって全伽藍焼失しました。そのあと西尾張部に移転して十一代行心が「光蓮寺」の寺号を拝領して再興しました。その際、本願寺十二代（東本願寺初代）の教如上人より授与された本尊御絵像です。裏書の「教如」自署名の下に書かれた花押（かおう）（筆のサイン）の型の鑑定によって、教如裏書本尊の最も古いものと本願寺史料研究所長（金龍静師）が認定しました。（花押の型は天正９年～10年と鑑定）

光蓮寺の法宝物　親鸞聖人御影御木像
（善光寺本堂親鸞聖人御花松由来）

写真左の青々とした緑色の松は、善光寺本堂に供えられている「親鸞聖人のお花松」です。善光寺参拝者に配布される案内書「ご参拝のしおり」に次のように記されています。

『本堂の板敷の広間が外陣です。外陣（げじん）中央には妻戸台（つまどだい）と呼ばれる舞台があります。その右側にはビンズル尊者（撫で仏）が安置されています。その妻戸台とビンズル尊者の間には「親鸞聖人のお花松」があります。鎌倉時代に親鸞聖人が参詣の折、御本尊に松を捧げられて以来、現在でも生けられているのです。』

その「お花松」が生けられている青銅製の花瓶の中に、身代わりとして収納されていた聖人御自作の木像が、江戸時代年末大掃除の際に発見されました。当時大勧進御用の大工棟梁常八が光蓮寺門徒であった宿縁によって当寺に伝来し、安置礼拝されているものです。

光蓮寺の法宝物　聖徳太子尊像(鎌倉運慶作)

写真右の御木像は聖徳太子おんとし16歳の尊像です。その左側の小さいお像は、お木像のお腹の部分をくりぬいて裏から入れて安置された如意輪観世音菩薩像です。

鎌倉時代、大仏師備中法印運慶が将軍源頼朝の招きを受けて鎌倉に到り、晩年は観音信仰により聖徳太子を深く尊信し、その信仰の証しとして謹刻したものといわれています。当寺十八代住職井上了恵が江戸浅草の本願寺別院輪番に出仕したとき、宿縁あってこの尊像を当寺に勧請したものです。このとき輪番は江戸幕府御三家の水戸公と宍戸(ししど)侯の厚い信仰を受け、水戸家八角葵(あおい)の定紋とともに仏具等の寄進を受けたと伝えられています。太子尊像は当寺聖徳会館の奥の太子堂に安置されています。

五分一区因講（ちなみこう）

五分一区因講は、南無阿弥陀仏の6字の名号がそのまま阿弥陀如来のお姿に描かれた「名体不二の御名号」（区宝）と呼ばれるお掛軸を掲げ、その年に区内で亡くなった方の法要を行い、僧侶の法話を聴聞するものです。

浄土真宗の二派の流れをくむお寺からの世話人２人ずつ、講中からのお手伝い役３人ずつで運営にあたっています。過去には西本願寺上人の御消息を賜ったこともある由緒ある行事です。「講」として行われるようになったのは、江戸時代末期頃からといわれています。従来は５月５日春祭りに引き続いて実施されていましたが、昭和56年より４月の第3日曜日が例会日となっています。

古牧地区

五分一太神楽

五分一太神楽は、約250年前（江戸時代中期）から伝わっているといわれています。太神楽は、笛を吹き、太鼓を叩いて、獅子を舞い、神に納め奉るものです。

五分一太神楽は、かつては農閑期に戸隠・芋井・七二会・小田切・古里・若槻・浅川等に泊まり込みで教えに出かけたり、近隣の若者が習いに来て各地に伝えられ、その影響は市内に及んでいたといわれています。昭和時代初期頃から後継者の不足等により、次第に衰退し、消滅の危機を迎えましたが、他地区で復活し、保存が図られています。現在は、春と秋の五分一区の例祭で、他地区から神楽を呼んで奉納しています。

返目神楽

返目神楽の始まりは、古牧五分一の神楽の流れを汲んだものと伝えられています。この神楽は、昭和50年代末から後継者不足のため中断していましたが、平成15年度に地区有志により再興しました。

再興当初、吉田小町の神楽保存会から指導を受けながら技術を習得し、現在は地域内の各戸舞や神社での本舞などを行っています。獅子は女獅子で、艶やかな舞が特徴です。

神楽を始め、地域住民と関わりの深い返目神社は、古くから返目八幡宮といわれ、返目村の産土神（うぶすながみ）として崇敬が厚かったと伝えられています。広さ1,875㎡の境内には、養蚕社、天満社があります。

毎年秋には、返目区主催の祭礼が行われています。

地域の魅力再発見　吉田地区

俳人・俳諧学者 茂呂（もろ） 何丸（なにまる）

俳人・俳諧学者として有名な何丸は、宝暦11年（1761）に水内郡吉田村（現在の吉田地区北本町区）で生誕し、77歳の生涯を終えるまで、京都・大阪・江戸の三都を往来し、30冊以上の著書を発表しました。

40歳代後半から芭蕉の俳句の研究に専念し、その功績が認められ、64歳の時に京都二条家（和歌の家元）より「俳諧大宗匠」の称号を受けました。

吉田地区では、「俳句のまち吉田」をキャッチフレーズに俳句大会の開催など文化振興に取り組むとともに、「何丸」を冠とした商品開発を行い、和菓子や日本酒などを販売しています。平成１９年の夏まつりでは、「何丸」を題材とした歌と踊りも初披露され、新たなまちの名物として期待が高まっています。